

コントラと内戦中のニカラグア紀行（元・3・18）

村田 信（昭14理乙）

なぜニカラグアに行ったのか

ニカラグアは中米の熱帯にあります。マラリヤは病気の中に入らぬほど悪疫蔓延の地です。しかも、ここは共産国で、なんとか、この共産国を叩き潰さんものと、レーガンがムキになって、反政府ゲリラ、コントラを支援したところで、今も北隣の国、ホンジュラスとの国境では、コントラが暴れています。

そんな物騒なところへ、昭和六三年から六四年にかけて、七〇歳を越した老躯をひっ提げて、行くような酔狂極まりないことをなぜやったのか。これは万人が抱く疑問と思われる。

そこで先ず、その理由をご説明いたしましょう。理由は二つあります。私は左翼カブレしていたことと、落ちこぼれであったことです。

三高時代、私たち同学年の理科学生には五人ほど、左翼カブレしていたものがいました。私たちより下の学年には一人もいなかったようですから、私たちが大正デモクラシーの残照の最後のなごりではなかったか、と思われれます。時あたかもスペイン内戦時代で、独伊正規軍の支援を受けたフランコ軍が、マドリードを攻めあぐんでいたころです。私たちは義勇兵になって参戦したい思いでした。

戦後になって、スペイン内戦について本が出るようになり、それらを読みあさっているうちに、スペイン人民戦線政府は、従来の左翼政権とは異質の、素晴らしい政権であることが分かってきました。

そして、その素晴らしきの因ってきた主因は、人民戦線政府は、共産主義ではなく、アナーキズムによって貫かれていたからであることが分かってきました。世上、アナーキズムというと、イコール、デカダンと思われていますが、それはとんでもない誤りで、アナーキズムこそ、ヒューマニズムと団体となった社会主義というべきものではないか、と思われれます。

ところが、ニカラグア共産政権も、このスペイン人民戦線政府と瓜二つなのです。ニカラグアは米国が支援したソモサ一族が、五〇年にわたって君臨し、暴虐の限りを尽しました。ニカラグア人口は三〇〇万人余りですが、ソモサ一族は三〇万人を殺した、と書いている本もあります。そのソモサのお蔭で、米国は甘い汁を吸い続けたのです。

ところが、そのソモサの国家警備隊は、戦車、空軍を持ちながらも、昭和五四年、空軍も戦車もないニカラグア民族解放戦線、サンディニスタのゲリラにより打倒されたのです。暴虐の限りを尽したソモサ一族は打倒されました。今度は革命政権がソモサ一族と、その同調者を、片っ端から殺戮する番です。ところが、この共産政権は政権樹立の翌月、死刑の全廃、最高刑三〇年。言論、信教、出入国の自由を布告し、非同盟、中立を国策としました。正に画期的な共産政権です。

この他にもう二つ、ニカラグア共産政権は今までの共産政権には考えもつかぬことをやっております。その一つは、キリスト教徒と共闘していることです。

それと今一つ、政権樹立後、海外から取材のジャーナリストを招き、野党の対立候補者も立て、自由総選挙を行ない、六七％を得票、圧勝しています。

スペイン人民戦線政府は、フランコ軍の捕虜の身柄を拘束せず、また、旗の色は赤と黒でしたが、ニカラグア政府も、刑の軽い囚人の身柄を拘束せず、かつ、旗の色は黒と赤です。フランコにより滅ばされた、かつての私たちの若い血潮を沸き立たせた人民戦線政府が、五〇年後の現在、突如、中米に再現した観があります。

ニカラグアでは、反政府の新聞も発行され、戦時下であるにもかかわらず、なんと、徴兵反対のデモが大手を振ってまかり通っているそうです。

本当にそんな共産政權があり得るのか、この目で確かめたくて、私はニカラグアへ出かけたのです。

私がニカラグアに行った第二の理由、それは、私が落ちこぼれであつたからです。

私は大正六年生まれですが、もう七〇歳を越した現在の私でさえ、私は就職の世話を致しかねます。従業員側に立つて、社長と喧嘩するに決まっているからです。七〇歳過ぎでもこれですから、若いころの私は推して知るべしです。私の人生は、正に波瀾万丈でした。

その波瀾万丈の人生については、会報五二号『三高生活が私の人生を変えた』に詳しく書いております。

私は昭和一六年に京大工、冶金やを出ています。一クラス一〇人余りですから、同級生は大抵、大手製鉄会社などの部長ぐらい、中には役員や社長、会長になった人もいます。

ところが、私はしがないめつき技術コンサルタント。それも収入はプラマイ、ゼロに近い始末です。

私の息子の友人A君は、高三まで水泳をやり、現役で、東大入試のなかった年の京大法科にトップで入ったとかの伝説のある人です。かつての全学連で、塾の講師などをやりながら、今も節を折らず反アパルトヘイト活動をやっていますから、世間的には落ちこぼれでしょう。

その友人のB君も同類項らしく、小さい旅行社をやっていますが、もうけにもならぬ、アフリ

カで野生のチンパンジーを観察するツアーを企画して、同業者の物笑いの種になっているそうです。この人が同じく、もうけにならぬニカラグアツアーを企画しており、そういう関係があつて、私もニカラグアに行けることになったのです。

ですから、私は落ちこぼれであつたから、ニカラグアに出掛けることになったのです。

このように、私は左翼カブレしていて、その上、落ちこぼれであつたので、これがダブルになつて、七十歳を越す老軀をひつ提げて、若い人に伍してニカラグアくんだりまで出掛けるという、酔狂をやらかす仕儀に相成つたのです。

ニカラグアとはどんな国か

ニカラグアのお話に入る前にお詫び。この標題を見ますと、いかにもドンパチの現場に行つたみたいですが、実際には一発の銃声すら耳にしていません。それなのに、こんな標題掲げるのは、いささか羊頭狗肉の感がして気が引け、講演を取りしきつておられる井垣兄にご相談したら、「その方が聴く人が増えてええやろ」とのお言葉。それで、ご免蒙つて、勇ましい標題にさしていただきました。お許し下さい。もともと私は、「ドンパチの現場に行かせろ」と旅行社に要求して、「とんでもない」と峻拒されたのは事実ですが。

ニカラグアはパナマの少し北にあり、面積は九州ぐらい、人口は前述した通り三〇〇万人余り、

大きい湖があり、火山の多い地震国です。

コロンブスのニカラガ発見以来、スペイン人は主として太平洋側に入植、住民は白人、白人と先住民のインディオとの混血、そしてインディオからなります。インディオは日本人よりは色が黒いが、黒人ほど黒くなく、体格も日本人に似ており、赤ん坊はお尻に蒙古斑があります。言語はスペイン語、宗教はカトリック、気候は乾期と雨期があります。

一方、大西洋側は英国が入植、住民は英人、先住民インディオとその混血、それと入植された黒人で、言語は英語、宗教はプロテスタント、気候は高温多湿です。

農業国で、コーヒー、綿花、牛肉、果物、砂糖などが産出され、コーヒーは輸出額の半額を占め、世界を制した米国のジーンズはニカラガの綿花といわれています。

工業は金を産出していますが、それ以外、見るべきものはないようです。

ニカラガを語る場合、サンデイーノを抜きにして語ることはできません。彼は明治二八年生まれ、父は白人の農園主、母は先住民のお手伝いさんで、彼は若い頃、父の蔵書をよく読んだといわれています。また、二十歳代に五年間、メキシコへ出稼ぎ、それが彼の視野を上げた、と思われまふ。その間に、メキシコ在住のスペイン人のアナーキストに強く影響されたといわれています。

三十一歳で帰国した彼は、祖国に二〇年にわたって駐留した米海兵隊を相手に、六年間にわたつ

てゲリラ戦を展開、遂に昭和八年、世界最強を誇る米海兵隊を、祖国から叩き出すのに成功するのです。海兵隊の死傷者が増え、米議会で問題になり、米政府も止むを得ず二〇年間にわたる駐留を諦め、前述のソモサに後事を托して撤退するのです。

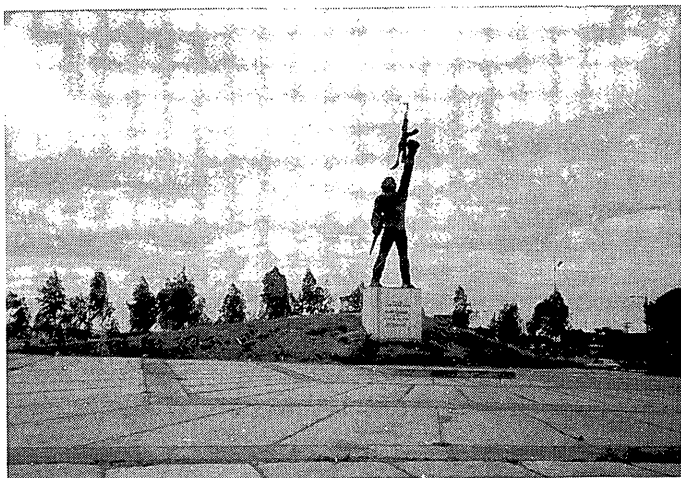
理想主義者の彼は、外国軍隊が居なくなった限り、ゲリラの使命は終わった、として自らの手でゲリラの武装を解除し、翌年、ソモサは「待ってました」とばかり彼を殺害してしまうのです。いかにも理想主義者らしい甘さです。

しかし、彼のこの理想主義は、彼の衣鉢を継ぐサンディニスタによって立派に継承され、前述したような、未だかつてなかった、素晴らしい共産政権の誕生になったものと思われれます。

ニカラグアはのんびりした国

ニカラグアの首都、マナグアの空港に降り立つと、サンディニスタの赤と黒の大きい旗が翻っていたので、カメラを向けたら、若い兵士に制止されました。「なるほど、ここは戦時中だったわい」。しかし、その若い兵士は権柄ずくなくところが全くなく、笑顔をたたえており、いかにも新生革命政権らしい爽やかさでした。

ここ、ニカラグアに来ての第一印象は、のんびりした国、ということでした。広い放牧場があり、牛が悠々と草を食んでおり、内戦なんてどこ吹く風、といった風情です。



首都の革命戦士像。傑作といえそうです。

それに、人が集まるところには、必ず数匹の犬がいるのです。戦時中の日本では犬や猫は一切見られませんでした。人間が飢えていましたからね。ここは農業国、それに熱帯ですから年中、果物が実り、人は腹一杯食べているようでした。

しかし、のんびりしているのは、首都マナグアや第二の都市レオンだからのことです。北の国境ではゲリラ戦が行なわれているのです。私たち一行は北部の都市マタガルパへ行きましたが、北へ行くにつれ、幹線道路の交叉点や鉄橋には、ライフル姿の兵士を見受けることが増えましたから、更に北上すれば緊迫した空気が支配的になるものと考えられます。

言論、信教の自由は先ず健在

言論の自由は先ず健在といえそうでした。野党第一党の書記長と会談しましたが、「ニカラグア全体が刑務所で、自由が全くない。役人は腐敗し、武器を大量に輸入するから、国家経済は大赤字。インテリは海外へ亡命してしまい、特に医者が不足。家内がお産で入院したが、一つのベッドに二人寝かされた。コントラは国民の不満の現れである。徴兵反対のデモの指導者が六か月の刑に処せられた。死刑を廃止したといっているが、山の中の人に知られないところで、密かに人を殺している」とのことでした。

しかし、この書記長、これだけいたい放題をいっても、殺されもせず、ピンピンしています。彼の顔写真入りの反政府の論文が、堂々と発行されています。彼の奥さんは、多寡がお産のために、国立病院に入院しているのです。戦時下の徴兵反対デモの指導者が、たった六か月の刑とは、無罪みたいなものです。この書記長の話ほど、言論の自由の存在を見事に証明したものはない、といえそうです。

ただし、少し気になることは、レオン在住の日本人針灸師によると、「反政府新聞があんまり無茶を書く、一週間ほどの発禁にしている」とのことでした。

私は、これは非常に遺憾なことと思います。発禁を繰り返しているうちに、政権の腐敗が始ま

ると考えられるからです。

信教の自由も健在で、私たちは元旦の夜、ミサに出席しました。ニカラグアには、革命政権に協力してバチカンから破門された神父と、破門されていない神父がいます。後者の教会には、信者は外車で乗りつけるそうです。

私たちがミサに出席した教会の神父は、破門された神父で、信者は皆、貧しそうです。

このミサには私たちと同じ国営観光局のマイクロバスが、計三台も来ていましたから、このミサは観光コースに組み込まれており、「ニカラグアには信教の自由がありますぞ」、とのPRが狙いのようでした。

なお、ニカラグアでは、混合経済といって、国営企業と小資本家企業とが共存しています。ですから外車を乗り回す人もいます。

熱帯だが無茶苦茶に涼しい

こちらへ来て一番驚いたことは、熱帯であるのに無茶苦茶に涼しい、ということでした。

もっとも、私たちが行ったのは高温多湿といわれている大西洋側ではなしに、雨期と乾期とがある、太平洋側の乾期であったためと思われる。

ホテルには冷房がありましたが、一度も使わずじまいでした。第一、暑いと感じたことは唯の

一度もありませんでした。太陽光線は強烈ですが、空気が乾燥している上に風があるからです。第二の都市レオンの国立病院の四階のビルの屋上で、白人の院長から辺りの風景の説明を聞きました。快晴の午前十一時ごろで、強烈な熱帯の日光がギラギラと照りつけていました。しかし、それでも涼しいのです。

しかも、その涼しさが通り一辺のものではないのです。爽涼の秋、という言葉があります。京都の秋でも、その言葉を思い起こさせる日があります。しかし、私が屋上で感じた爽快感は、そんな生優しいものではないのです。体全体が躍動するような、言語に絶する爽快感でした。あの爽快感は、おそらく私は一生忘れないだろうと思います。

ニカラグアは風がよく吹くことは確かなようです。風車をよく見受けました。鯉登りの矢車の様な直径一米以上もありそうなものが、高い鉄の柱の上に取り付けてありました。おそらく発電用と思われます。また、風が上がつているのを、二度、見ました。これも風のある証拠でしょう。このように、ニカラグアの太平洋側の乾期は、空気が乾燥している上に、よく風が吹くので、言語に絶する涼しさとなるものと思われれます。

ニカラグアの町はスペイン風？

私はスペインに行ったことはありません。しかし、ニカラグアの都市はスペインの都市にそっ

くりではないかと思ひます。コロンブス以来、ずっとスペイン人が支配してきたのですから。

都市の中央には、必ずカトリックの大伽藍が聳え立っています。民家は窓が小さく、少なく、白いしついで塗り固められています。道幅は広く、碁盤の目状に区画され、舗装されています。作動するかどうかは知りませんが、首都マナグアでもレオンでも、町角には消火栓が突っ立っていました。

町にはケバケバしい広告は一切みられず、ゼロックスの看板一つと、歯科医の看板を二つ見掛けました。帰国してから見た、スエーデンで作られたテレビで、ニカラグアの少年兵が虫歯になり、それを素人が治療する場面がありました。ニカラグアは砂糖の国。市場では砂糖キビの皮をむき、三〇糎ほどに切り揃えた束を売っていました。お菓子代わりにそれを食べるので、虫歯が多いのではないかと思われまふ。

闘牛士の絵や刺繡をよく見受けるのは、勿論、スペインの影響でしょうが、揺り椅子が多いこと、ハンモックが多いのもスペインの影響ではないでしょうか。

挨拶をするとき、軽く抱き合い、頬ずりをする。更に親愛の情を示すには、頬に軽くキスする。これもスペインの風習ではないでしょうか。

これらの私の当て推量、当たっているかどうか、スペインに詳しい方にお教えいただきたいものです。

大きかった米国の影響

ニカラグアに対する米国の影響は、計り知れぬほど大きかったようです。

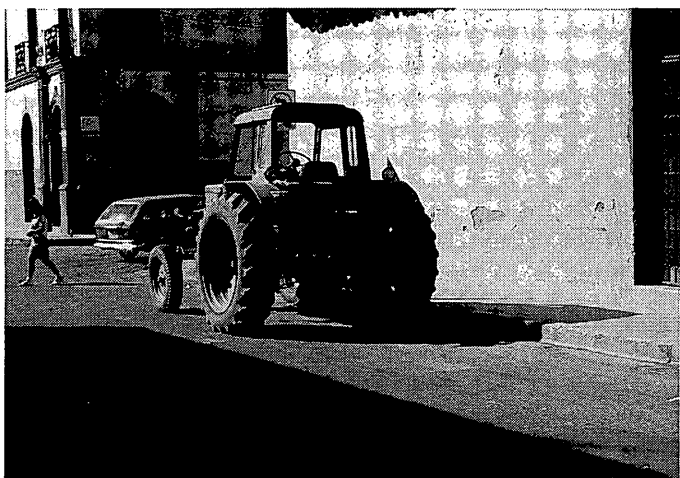
中南米はスポーツはサッカー一辺倒ですが、例外はキューバとニカラグアで、この二国だけは野球です。その二国だけに共產革命が起こったのは、興味のあることです。

マナグアには野球のナイター設備がありました。また、自動車に乗ったまま映画を見る劇場もありました。まるで米国みたいです。

中南米という巨大製糖工場を見学しましたが、常時、三、〇〇〇人の労働者が働くこの巨大設備には、米国の資本と技術とが関与していたのではないかと思われます。

また、広大な綿花畑が至るところにあり、そこには大規模のスプリンクラーがあり、常時、散水しておりました。乾期はスプリンクラーが不可欠のようでした。この巨大なスプリンクラー設備にも、米国のバックアップがあつたのではないかと考えられます。

コロンブス以来、スペイン人が支配しているといっても、モンロー主義を唱導し、二〇年にわたって海兵隊を常駐させていた米国が、実質上はニカラグアを支配していたものと考えられます。このように米国はニカラグアに国費を注ぎ込み、力を入れていながら、結局はニカラグアから叩き出されて、ニカラグアからは一番の仇敵視されているのですから、割りの合わない話です。



大型トラクターが市中を闊歩。



国営巡回バス。大型バスもあります。



国営観光局のマイクロバスで屋根に物を載せるようになっているが車はトヨタ。



幹線の鉄道。貨車がグリーン車といったところか。

ニカラグアの交通機関

ニカラグアに来てみて意外に思ったことは、交通機関は種類の点では日本と変わらぬことでした。いや、日本にないものさえありました。大型トラックターの^{すゑ}鋤を取り外したものが、都市を我が物顔に闊歩していました。後輪のゴムタイヤは人の背丈ほどもある大農法のトラックターです。おそらく綿花畑や砂糖キビ畑の耕作用に、米国から導入されたものと思われます。

種類の点では日本と比肩しますが、質の点では話になりません。ニカラグアでは車検がないのです。車体はデコボコ、赤錆だらけ、中にはヘッドライトが片方だけ、というようなオンボロ車が大手を振って走っていました。

マナグアの市内巡回国営バスなるものは、軽トラックの荷台に手摺をつけたもの。非常に運賃が安い由で、いつも相当数の乗客が乗っていました。

車は圧倒的に日本車が多く、その中でもトヨタは一頭地を抜いていました。これは中国でも同様でした。

この国のバスの著しい特徴は、屋根の上にも人や荷物を載せることです。私たちが毎日、利用した国営観光局のマイクロバスも、トヨタの新ピカでしたが、天井に登る梯子と天井には手摺がつけてありました。特注したものと思われます。

鉄道も走っています。無蓋の台車に人が乗っており、窓付きの貨車が、グリーン車と思われる。
した。

なお、こちらでは馬車も立派な交通機関。荷車の上に数人の人を載せて、大都市の町中をパカ
パカやっているのどかな風景をいく度となく眺めました。

献身する日本人針灸師たち

ニカラグアには数人の日本人の針灸師が、治療と針灸師の養成にご活躍中です。中には、ご夫
婦揃って針灸師の方もおられました。

ニカラグアの日本人針灸師の中で、一番有名なのは井上真氏まことです。ニカラグアに関する本も書
いておられるし、多数の論文も発表しておられ、おそらくニカラグア革命に関しては、日本人の
中では第一人者ではないかと思えます。

はじめキューバにおられ、後にニカラグア革命政府に請われて、ニカラグアへ来られ、針灸治
療を取り入れた自然休暇村を設立しておられます。

別に、もう一つ針灸治療院があり、ここに二名の日本人針灸師が勤務、中の一人は奥さんも針
灸師で、腕はご主人より上の由です。

この中のお一人は空手の達人で、製糖工場見学後の、その労働者との交流会では、弟子の先

住民の少年を相手に、空手の型と組手を披露、ヤンヤの喝采だったし、翌日のレオン市民との連帯の夕べでは、先住民のグラマーの女子大生の奥さんを相手にタンゴを踊られました。タンゴの本場の現地人とは比べものにならぬほどお上手で、競技会に出られるのではないか、と思うほどでした。

その前には尺八の演奏もされ、その多芸振りには驚きましたが、同僚の日本人針灸師によると、雪上車以外の運転免許は全て取り、教員免許をはじめ取得した免許、その数を知らずとのことでした。

これらの日本人針灸師のご努力により、針灸医療が普及し、大きい成果を挙げ、現地人の中からも針灸師が続々と養成されており、製糖工場の労働者の中からも、初歩の針灸術をマスターした人々が生まれ、労働者との交流会の席上で、彼らの実演を見せていただきました。

私は針を見たのは初めてですが、細い長い針がスイスイと体内に吸い込まれ、一滴の血も出ず、打たれている人も一向に痛そうな顔をしていないのは、不思議千万でした。医薬品が極度に不足している当地では、薬品が要らないで大きい効果があることと、比較的に容易に修得できるので喜ばれているそうです。

B氏の旅行社が、既に数次にわたってニカラグアへのツアーを企画しているのは、もぐさや針の補給と日本人針灸師への差し入れ品の運び屋をかねているのです。郵送では着いたり、着かな

かったりで、運ぶに限るということでした。

自然休暇村も針灸診療所も、ニカラガ政府は精神的なバックアップはしているが、資金に関しては全額、日本の民間からのカンパで賄っているとのことでした。

レオン市民と連帯の夕べで自己紹介があったとき、五歳ぐらいの幼女がこういいました。「私は日本が好きです。それは針灸師のお二人が好きだからです」。

私はこの言葉に感動しました。おそらくは骨を埋める覚悟で、遠い南の果てのこの国へ来て、その住民の中に溶け込んで住民のために献身し、住民から深く敬愛されている日本人針灸師たち。エコノミックアニマルといわれている日本人の中にも、こんなに立派な日本人がおられるのを、私は誇りに思いました。

首都の公園にナマケモノがいた

マナグアのホテルで、昼食をプールサイドの樹下で取っていたら、樹の上の手の届きそうなくところに、極彩色のとてつもなく大きいインコがいました。それも、鳥籠から逃げたのではなく、自然の野性のインコなのです。そのインコを見た瞬間、「熱帯に来たんだなあ」と実感しました。レオンのホテルの見上げるように高いハイビスカスの樹の赤い花に、蜂鳥が来て蜜を吸っていました。メジロより小さく、胴体が葉巻のように細長く、羽根は高速で羽ばたいているので、扇



ホテルのプールサイドの野生の極彩色のインコ。サンダルと比べると、その巨大さが分かります。

風機の羽根のように透き通っていて見えません。私は野鳥の餌付けをしているので、スズメが空中で停止しているのを始終、見ていますが、スズメの場合は、必死になって、やっとこさ空中停止をしているのですが、この鳥は楽々と、そして微動だにせず、完全に空中で停止しているのです。私は、この鳥をテレビで二、三度見たことはありました。しかし、実際に野性のものであると、別の鳥を見ているような新鮮な印象を受けました。『この旅行に來た甲斐があった』といった感じでした。

マナグアの国会議事堂の前の公園の樹の上に、ナマケモノがいました。その名に恥じず、下では私たちがカメラやビデオカメラを手に手に、ワイワイ、ガヤガヤやっているが、全然、動くとしなないのは天晴れでした。

しかし、ジャングルの中ならともかくも、首都の中央の公園の樹木に棲息せいそくしているなんて、自然に恵まれていて、うれしいことだと思いました。

ニカラグアの国鳥はグワルザバランコといい、ヒヨドリを少しスリムにした感じの鳥です。よく馴れていて人を恐れないのは、国鳥だから特別に大事にされているからか、と思いました。そうではなくホテルのインコモ、人の靴にスレスレまで近付いて来ました。ナマケモノが公園に棲息していることといい、ニカラグアの人々は鳥獣を迫害しない風習があるようでした。

日本は嫌な国

ニカラグアに来て私は、今更ながら日本人であることに、反吐の出る思いをしました。

ニカラグア救援にソ連やキューバが力を入れているのは分かるとしても、なんと、米国からも多数のボランティアが殺到しているのです。私の泊まったレオンのホテルにも、米国の大学教授が長期講演のため滞在していました。スペイン内戦の映画「誰がために鐘は鳴る」の主人公は、義勇兵の米人教授でした。それから五十年後の現在、ここ、ニカラグアでボランティアの米人教授を目の当たりに見て、私は感無量でした。

海外からの支援活動はヨーロッパ各国、特にスエーデン政府の援助が目覚ましいといわれています。革命政権が行なった前述の自由選挙には、人材の派遣、コンピュータ、投票用紙、鉛筆の

寄贈に至るまで、政府と民間人が全面的に協力したといわれています。デンマークは学校の建設に力を入れ、毎年、五つの学校を作り、多数の建設労働者と技術者を送り込んでいるとのことです。

ノルウェーでは医学校を卒業し、医師になる資格をとる前に、第三世界への二年間の実地診療をすることが義務づけられ、奨学金が出るそうで、ニカラグアへ来る医学生が多いということでした。こうすれば、日本でも医は算術、の医師が減るのではないのでしょうか。

イタリーからは画家がボランティアとして来ていました。私たちがミサに出席した教会の内壁は、極彩色の宗教画が一面だったし、製糖工場の塀には、サンディニスタの勇戦振りが、これまた大書してありました。

これに反して日本からの支援は、政府からはゼロというまでもありません。主体性の全くない、米国ベッタリの国ですから。それでいて頭越しに米国に、中国と手を握られて憤慨するお粗末な国ですから、我ながら嫌になります。

私の知っている限りでは、日本からのニカラグアへの援助は、民間のカンパによる針灸診療所や自然休暇村の設立。それと数人の針灸師のボランティアとしての活躍。それとB氏が企画する私たちのツアーが、運び屋として搬入するスズメの涙ほどの品々。

もっとも、日本のAA連帯という日共系といわれている組織から、合計一、三〇〇台の自転車

が贈られた由です。私も製糖工場で一台、赤塗りで寄贈者の名前を白書した、その自転車を見ました。

日本の有り余る貿易黒字と高度の工業技術を、こうした国々に供与すれば、もう少しは日本の悪評が減ろうというものでしょう。

現在、ニカラグアは凄いいんフレで、私たちがお逢いした日本人針灸師の方々の生活も危機に頻している由で、B氏を含めて救援組織ができましたので、私も毎月、三、〇〇〇円のカンパをさしていただいています。

これというのもニカラグアへ行ったからで、若い人々に伍して、老軀をひっ提げて出掛けて、私は本当によかったと思っています。老人同士の旅では絶対に期待できない、新鮮な感動の連続でした。

私も、もう一度、行つて見たいと思っています。この思いは、今回のツアー参加者九名の、全員に共通した思いでした。